原爆文学研究会報
第七十六号
原爆文学研究会　二〇二六年三月

東京で向き合うということ、胸騒ぎ

堀本　嘉子

想像を絶する経験をしたときに人は何を残すのか。父や母や祖母や祖父や、そこかしこにいたかもしれないあの人やこの人の記憶を辿って、死者の声を聞こうとする。先達の残した言葉を引いて、咀嚼して、表現して。それは「自分」を確認するような作業だった頃もあったのだけど、最近は、だんだんと意味が変わってきたような気もしている。

二〇二五年の原爆文学研究会は、福岡大学、広島大学、長崎大学で行われた。東京から飛行機や新幹線に乗って、対面で参加をした。福岡はどんより雲に雨が降った研究会だった。夏の広島では、小林エリカさんを含むアーティストを招いたワークショップが行われた。この時の懇親会で、ワークショップのキュレーターを務めた三上真理子さんから八月十五日に東京の日比谷でイベントをやるという宣伝がされた。さっそく申し込みをして、当日、四歳になる息子を連れて参加をした。広島では動かさず展示室として見学したバスが、日比谷では皇居周辺を周遊するバスツアーの形をとって案内がされた。息子と乗車した。

道先案内のバスガイドを小林エリカさんが務めた。幼児である息子は一人大人に囲まれて、何がなんだか理解はしていないわけだけれど、私は、皇居というものを囲む、この土地の、ちょっと他と違う空気みたいなものを、感じてしまっていた。

この日のイベントの中で、東京の被爆者団体・東友会の地域支部にあたる武蔵野けやき会の会長をされている松田隆夫さんに出会った。ご自身が胎内被爆者であるという松田さんは、原爆文学研究会のワークショップでも日比谷図書館のイベントをキュレートした三上さんに声をかけられて本会の壇上でお話をすることになったそうだった。この日をきっかけに、松田さんが呼びかけている勉強会に少しずつだけれど参加させてもらっている。

大学院生だった頃から原爆文学研究会で勉強させていただくようになり、紆余曲折を経て、私は今、東京都内の中高一貫校で国語科の教員をしている。長崎の被爆者だった祖父母は戦後に大阪へ渡り、三人の子供を育てた。被爆二世であった（と本人達は言っていなかったけれど）叔父や叔母がこの十年の間に亡くなり、そして、十一月、私の母も亡くなった。癌だった。大阪に生まれ育った母は、結婚をきっかけに東京に移り住み、在宅介護のホームヘルパーとして、都内利用者の自宅に出入りをしていた。その中には戦後、広島や長崎から結婚や就学、就職で東京住まいになった被爆者の方がいることや、それぞれの戦後の話を母を通じて、名前も顔も知らない誰かの「物語」として聞いていた。長崎大学で行われた原爆文学研究会、作家の

青来有一さんをお招きしてのワークショップが行われた日は、母の四十九日だった。

あの日、語られた、長崎で「ナガサキ」を語るということ。証言と語りの狭間で、表現すること、発信し続けることの、ゆらぎについて。それはそのまま、これからの時代を担う世代が抱える未来で、ゆらいでいることそのものの輪郭がはっきりとして迫ってくることが、少し、怖くもあった。

長崎から東京は、遠い。広島も遠い。私の現在の勤務校は東京大空襲戦災資料センターから徒歩二十五分、かつて「空襲」の記憶を辿ることで平和について考えていた時期もあったようだ。今は、日々の「学習」に追われてゆっくりと土地の記憶に向き合う時間をとることは忘れられつつあるようにも思う。修学旅行や家族旅行の機会がなければ、遠く離れた土地の記憶に触れることはない。知識と想像で補っていくしかない。

日々のニュースで流れるイラン情勢にさえ、向き合い、考える前に疲れてしまう様子を目の当たりにする現実がある。戦争は、遠い日の、あったのかも分からない「歴史」にしたい。そんな声が聞こえてくるような気さえしてくる。

掌にいつでも収まっているスマホ、タブレットで得られる快楽を日常にできるなら、過去の出来事に向き合う時間は無用なのか。いつでも、調べて知れるはずなのに、だからこそ、知らないままやり過ごされてしまう。

残された「ことば」や展示の向こうに見える「あの人」は私だったかもしれないということ。これからを生きるあの子達に、私は何を手渡せるのか。何を手渡したいと考えるのか。あなたは、どう思いますか。

第七十六回　原爆文学研究会報告

二〇二五年十二月二十日（土）、二十一日（日）に第七十六回研究会を長崎市内で開催しました。一日目は、作家の青来有一氏をお招きした特別企画「青来有一文学の三〇年」が行われました。青来有一氏のこれまでの執筆活動を楠田剛士さんがまとめた後、作品についての研究発表を栗山雄佑さん、篠崎美生子さんがされました。その後、青来有一氏から講演をいただき、登壇者との対話、会場の聴衆を交えた質疑応答が行われました。

二日目は個人の研究発表が二本。屈帥帥さんから「中国における原爆文学の受容」について、飯野向日葵さんからは「青来有一『虫』論―蠅と生と死―」が発表されました。

発表１

青来有一文学史

楠田　剛士

二〇二五年は広島・長崎の被爆八〇年にあたるが、青来有一にとっては一九九五年に「ジェロニモの十字架」で文學界新人賞を受賞し作家デビューしてから三〇年、「聖水」で芥川賞を受賞してから二五年、代表作『爆心』の連載から二〇年にあたる年でもあった。その三〇年の作家活動について二つの視点から報告した。

一つ目は作成した著作年譜から窺える作歴の特徴を述べた。小説については単行本未収録のものがあり、国会図書館などで

データベース化されていない掌編も少なくない。小説以上にエッセイの数は多く、近年は複数の新聞で連載を持つ。青来によれば、小説を書く出発点は自分の内に積み重なっている記憶だというが、これはエッセイにもいえる。エッセイに短くまとめた考えを小説に膨らませていったこともあると述べるように、青来は小説とエッセイを両輪として執筆を行ってきた。執筆以外では、原爆・核に関する談話・講演や文学賞の審査員などがあり、文学を通じた継承も重要な仕事となっている。

二つ目は『爆心』を中心に原爆小説の変遷を述べた。「ジェロニモの十字架」の直後に発表された掌編「十五夜」では爆心地が舞台となるが、被爆者像は定型的なものにとどまる。「雪の聖地」も爆心地が舞台だが語り手は女性であり、不倫や障害者といった『爆心』につながる要素が見られる。「爆心地の夏」では老いた女性の語り手や記憶の空白が描かれ、プレ『爆心』といえる作品になっている。こうした試行錯誤を経て『爆心』に到達する。その後は特に林京子との出会いが転機となり、『爆心』とは別の描き方（小説の主人公と自分を重ねて書く「愛撫、不和、和解、愛撫の日々」、文献を引用して書く『人間のしわざ』、事実と虚構を混ぜて書く「フェイクコメディ」など）が試されていく。近年では被爆体験を問い直す文学の力や、核抑止論に対峙する核時代の文学に関して積極的な発言が見られる。新しい原爆文学を模索する青来の創作に引き続き注目したい。

発表２

「爆心」から〝Ground Zero〟へ
―世界文学としての青来有一作品を考える

栗山 雄佑

本発表では、青来有一『爆心』のドイツ語、英語、トルコ語版翻訳に対する書評を基に、作品集が各国でいかに読まれているのかを紹介し、その上で青来が語る「原爆も殉教も切実な自分のテーマでもなく、しょせん他人事、「土地の記憶」なのだという位置づけ」という観点、その中から生まれた「土佐源氏」として「モラリストでない被爆者」として性欲の疼きを持つ被爆者を書く意味を提起した。若干、発表題と内容とが乖離してしまったため、時間の制約も重なり分かりにくい発表になったことは申し訳なく思う。

海外での〝Ground Zero〟評価において、発表冒頭で紹介したように、作品の翻訳は二〇〇九年三月に文化庁の翻訳出版事業に採択された後、最初のドイツ語版が出版された二〇一四年に至るまでに、〈三・一一〉を挟んでいる意味は大きいように思う。そのために、ジェイ・ルービンがアンソロジーをまとめる際に「一九二三年の関東大震災から始まり、一九四五年の広島と長崎の原爆投下を含む「災厄　天災及び人災」のカテゴリーを想定し「虫」が収録されたことに見られるように、『爆心』の各作品の評価は国内と国外で乖離を生じているように思える。この乖離とともに、質疑応答で出た「フェイクコメディ」、「この惑星の悲劇」といった各国の首脳を描く青来作品が各国

でどのように読まれうるか、といった観点は今後考えていきたい。それは、今回の研究会に各国の青来作品の研究者が集っていることにも連関するだろう。

また、発表後半で提示した「石」のアダム、「虫」の光子の内面にある性欲の疼きの発話困難性については、講演や質疑応答の内容を受けてさらに考えを深めていきたい。青来は「虫」について、「高齢の被爆者を、ひとり語りでうまく演じきったという満足感」を持ったと記す。この「ひとり語り」で架空の人物が持つ性欲を「演じき」るという試みにおいて、アダムや光子の内面にある〈饒舌〉と〈発話困難〉は被爆経験の語りとどのように連関していくのか、あるいは前述の〈三・一一〉を描く作品において性愛を語ることの一種の困難とどのように接続できるのか。それは、ジェンダーやクィアの観点からどのように読まれ、更新されていくのか。この観点については、論文化の際に提起できたらと思う。

発表３
「人間のしわざ」という物語のために

篠崎　美生子

こんな話をしました。

――「法定被爆者」のいびつな拡大のせいもあってか、長崎の被爆者自認は非常に複雑である。そうした多様な被爆者および、未体験の被爆者ともいうべきあらゆる人々を総括するためには、いわゆる「被爆太郎」の物語を立ち上げるしかない。ただ、長崎にあってはその前に、分断の根拠となりかねない〈浦上燔祭説〉を解除しておく必要がある。『人間のしわざ』は、ヨハネ・パウロ二世の「戦争は人間のしわざ」との言葉を核にした点でも、生粋の長崎人青来有一によるという点でも、上述２点を満たす物語の資格がありそうだ。

この小説の視点人物は、殉教する人々の幻を介して、人間の苦しみの前で神は何をしているのかという遠藤周作的とも言える問いを反復させる。死を前にして初めて自分が信徒であったことを思い出す「殉教者」たちの姿は、特定の信仰と原爆の関係を、より普遍的な人間の問題にひらく。しかも、「神のみわざ」でも「人間のしわざ」でもない「自然のしわざ」が設定され、思考実験の中でその第三項が他の二項を浸食し神の不在に踏みこみかける点は、林京子的でもある。

ただ、「原発襲撃」の消化不良によって、フクシマは物語から放逐されたのではないか。長崎の問題に限っても、朝鮮人、中国人を含む長崎じゅうの人々を工場に集め、原爆を呼び寄せた「三菱」、その背後にある国家、天皇の問題も放置されている。井上光晴、佐多稲子の提起したこれらの問題も含め、長崎の人々がわがことと感じながら共有できる物語を、改めて青来有一に望む。

――氏のお話の中で、「ヨブ記」へのこだわりが印象深く残っていますが、人にとっては意味のない苦しみこそ耐えがたく、逆に言えば、苦悩の後には大文字の意味を求めてしまいがちです。そのことの危険性を、小説の形で手を変え品を変え語ってほしい。これは〈浦上燔祭説〉をこえ、長崎の問題をもこえて、

人の普遍的な問題となるはずです。「今の核の時代の証言者」となることとも矛盾しないはずです。

読者がしっかり立って生きていくためのよすがとなるような物語を、改めて青来氏に期待しています。

◇印象記

青来有一「証言と語りのあいだ―長崎での30年の作家活動をふりかえって―」

パラギナ・アレクサンドラ

二〇二五年十二月二〇日、原爆文学研究会が主催する「特別企画　青来有一文学の三〇年」が長崎大学にて行われました。青来有一氏の作家活動三〇周年を記念して企画されたこの特別プログラムは、示唆に富んだ三つの発表とともに、ご本人をお迎えして講演を拝聴できる、またとない機会となりました。

まず、楠田剛士氏の「青来有一文学史」と題した発表では、青来有一の著作を網羅した詳細な年表をもとに、この三〇年にわたる作家としての歩みを丹念にたどられました。続いて、栗山雄佑氏の発表「『爆心』から〝Ground Zero〟へ―世界文学としての青来有一作品を考える」では、『爆心』が国内外の多文化的な文脈の中でどのように読まれてきたのかを紹介されました。さらに、篠崎美生子氏の発表「『人間のしわざ』という物語のために」においては、被爆者のアイデンティティの多様性やリプレゼンテーションの問題を提起し、『人間のしわざ』をめぐる考察を通して、共有されうる長崎原爆被害の物語がどのような形であるべきかを問いかけました。そして、青来有一氏の「証言と語りのあいだ」と題した講演では、氏は自身の作家活動をふりかえりつつ、証言と語りの違いや原爆文学の想像力について多方面から語られました。当日、数多くの貴重な指摘がなされましたが、すべてに言及できず恐縮ですが、以下では私自身の印象に残った数点にトピックを絞りたいと思います。

まず、青来氏の講演では、一つの大きなテーマとして、「証言と語りという二つの両極のあいだに立つ小説家のスタンス」が挙げられました。証言が被爆者による事実の告発である一方、語りは当事者でなくとも原爆への思いを伝えうる、よりパフォーマティブな営みです。青来氏は当事者の言葉の重みを認めつつ、証言が常に優位であるべきかどうかを問いかけ、人間の苦しみを伝えるうえでは、むしろ語りのほうが場合によっては有効なのではないかと述べられました。語りは事実と嘘を織り交ぜながら成り立ちつつ、どこか人の心に響く力をもっています。とりわけ印象的だったのは、「人間の心は物語のような構造をしているだろう」という青来氏の言葉でした。講演や質疑応答でも触れられていたように、物語とは本来的に、直接の関係がない事象同士を結びつけて思考する営みであり、そのこと自体が人間の本性なのだといえます。実際、今回の企画でも議論を呼んだ永井隆の浦上燔祭説は、浦上の信徒にとって、ある種の慰めの物語として機能していたと思われます。もちろん、例えば陰謀論の場合のように、事実を顧みないことは危ういものの、

人の想像力はどうしても結びつきや理屈を見出そうとするものなのだ、という指摘に深く納得しました。

さらに、講演のもう一つのキーワードであったのは、「揺らぎ」だと思います。青来氏は自身の創作活動を振り返りながら、証言と語りのあいだで揺れ動いてきたことを強調されました。証言と語り、真実と嘘、事実と虚構――原爆をめぐる物語を考えるとき、そこには常に、さまざまな事象のあいだにおける揺らぎが内在しているように感じられます。青来氏は、そうした問題について、どちらか一方ではなく、その「あいだ」こそが肝心なのだと述べられました。揺れながら考えること自体が重要であり、小説とは、そのような「揺らぎ」を表現する装置なのだという指摘は、鋭い洞察力に満ちたものであり、「揺らぎ」とともに生きることの重要性を、この講演を通してあらためて認識しました。

今回の企画では、質疑応答も非常に活発で、原爆と核兵器を結びつける想像力の問題や、神の全知全能をめぐる問い、生成AIによる物語や匿名性の問題、さらには現代政治をめぐる多様な論点などが提示されました。どのような困難があるにせよ、私たちは現代特有の課題と向き合いながら、記憶の継承のあり方のような歴史と文学をめぐる諸問題について粘り強く考え続けていく必要があるという思いを、今回の講演を通じて新たにしました。

◇研究発表1
中国における原爆文学の受容

屈 帥帥

中国において原爆文学がいかに受容されてきたのかという問題は、日本の原爆文学研究や中国文学研究や翻訳研究において断片的には言及されてきたものの、翻訳・研究・創作の連関という観点から体系的に検討されてきたとは言い難い。本発表は、中国の立場から原爆文学の受容過程を歴史的に整理し、その特徴と変容を明らかにすることを目的とする。ここでいう「受容」とは、翻訳や研究を通じて形成される理解の枠組み、さらにはそれらが中国人作家の創作に与えた影響を含む概念として位置づける。

具体的には、現在に至るまでの原爆文学の中国における翻訳・出版の動向を整理するとともに、原爆文学の影響を受けて創作を行った中国人作家として、巴金の散文および童喜喜の児童文学作品を分析対象とする。両者は、世代やジャンルの異なる作家であり、日本原爆文学が中国文学においていかに受容され、再解釈されたかを示す一定の代表性を有していると考えられる。分析の結果、原爆文学の影響を受けた中国人作家は、日本の原爆被害に対する同情を示しつつ、自民族の戦争被害を主題化する作品を同時に創出してきたことが明らかとなった。

翻訳作品および中国人作家による関連作品を通観すると、中国における原爆文学の受容は、大きく三つの段階に区分できる。第一に、一九四〇年代から一九七〇年代にかけては、原爆被害

への同情とアメリカ批判を軸とする、イデオロギー的読解が支配的であった段階である。第二に、一九八〇年代以降は、原爆被害の「民族性」を相対化・批判しつつも、自国の戦争被害を強調する読解が現れ、日本原爆文学を参照しながら自国の歴史経験を再構成する段階である。第三に、二〇〇〇年代以降は、原爆被害と自国の被害経験の双方を視野に入れ、人類的観点から核問題を再考しようとする段階が確認できる。すなわち、中国における原爆文学の受容は、翻訳による導入から始まり、批評的再解釈を経て、原爆を主題とする中国人作家による主体的創作へと展開してきた過程として捉えられる。当日の質疑では、中国の原爆文学の存在、中国の核実験に関する作品といった点に質問が集中した。また、日本原爆文学の翻訳・紹介をめぐっては、中国の作家がエスペラント語を通じて原爆文学に接していた可能性も指摘され、原爆文学受容の経路や媒介言語を含めた多角的な分析の必要性が示唆された。

中国において、原爆や原発を描写する文学が、今後いかに原爆文学の影響を受けつつ展開していくのかを検討することは、重要な課題である。とりわけ、文学表象と被爆者の記憶、さらには核をめぐる政治的・社会的言説との交錯を視野に入れた検討が、今後求められるであろう。

◇研究発表２
青来有一「虫」論―蠅と生と死―

飯野　向日葵

本発表では、青来有一「虫」（二〇〇五）について従来も触れられてきた多義的な虫のイメージが、「被爆者」である「わたし」のどのような認識において捉えられているかに注目した。夢と現、生と死のはざまにいつづける「わたし」は、被爆後の「虫の世界」において人間を虫的なものとして捉える。虫は他者として現れながらも人間と連続性を持ち、特にウマオイには「わたし」を含めたさまざまな人間が重ねられる。結末におけるウマオイ（佐々木）とわたし（虫的な）の生殖のイメージは、信仰の外側における「虫の世界」が続いていくことを予期させた。

本作において蠅は人間を生に留めるものとして現れるが、そうしたあり方は「被爆者」を描く他作家の小説とは異なる。中山士朗「死の影」（一九六七）と林京子「二人の墓標」（一九七五）と「虫」を比較すると、本作は蛆そのもの、蠅や蛆が身体を侵食する脅威や痛みを描いていない。また、蠅や蛆と同等なものとなることを人間のあり方からの逸脱として否定的に捉える二作に対し、本作はそのイメージを覆している。さらに、被爆後に蠅が生き残る世界を提示する井上ひさし「少年口伝隊一九四五」（二〇〇八）、海野十三「ふしぎ国探検」（一九四七、八）と比較すると、本作は神をめぐる想像力のなかで蠅の生を肯定する「虫の世界」を描くことによって、原爆投下後の世界

がかたちを変えながらも続くことを示すという点で異質であった。このような蠅を含めた「虫の世界」を描く本作は、後にも虫を描いていく青来文学や、動物と人間の関係を模索している現代文学においても重要である。

たくさんの質問をいただいた。足を引きずる女性の「被爆者」のイメージ、虫的な「わたし」の祈るありようについてのご質問は、本文の「正座ができない、投げ出した左足に痛みが走」るという、正しい姿勢で祈ることができない「わたし」のあり方にも見ることができると考えた。また、エコロジカルな観点からも虫と人間を考えられるというご指摘や、蠅を汚く描かないことで死者の尊厳を見出すことができるという視点を提供いただき、青来氏の小説における人間のあり方そのものの理解が蠅や虫によって深まり得るという視座を得た。また、全能ではない神と人間、虫との関わりや「信と疑」の間で生じる揺れ動きについてのご指摘で、それらを「虫の世界」という言葉で括りすぎていたことに気付かされた。貴重なご質問とご意見をいただいたみなさまに感謝申し上げます。

彙報

第七十六回　原爆文学研究会

○日時　二〇二五年十二月二十日（土）・二十一日（日）

○会場　長崎大学教育学部33番教室

○特別企画「青来有一文学の三〇年」

発表①　青来有一文学史　　楠田　剛士

発表②　「爆心」から〝Ground Zero〟へ
　　―世界文学としての青来有一作品を考える　　栗山　雄佑

発表③　「人間のしわざ」という物語のために　　篠崎　美生子

○講演　証言と語りのあいだ
　　―長崎での30年の作家活動をふりかえって―　　青来　有一

○研究発表①　中国におけ原爆文学の受容　　屈　帥帥

○研究発表②　青来有一「虫」論―蠅と生と死―　　飯野　向日葵

編集後記

研究会にご参加いただいた皆様、会報への執筆をご快諾いただいた皆様に心より御礼申し上げます。巻頭エッセイは、会報の編集を担当した堀本が執筆いたしました。

戦後八十年という節目を、それぞれがそれぞれの場所で過ごされたと思います。「戦後」からの年月を数えれば、ずっとずっと遠くのことのように感じられる出来事も紡がれた言葉を通してみると、今ここにあるように実感できます。忘れてしまわないように、ましてや消えてしまわないように、言葉を紡いで繋いでいくことが、ますます必要だと、中学生や高校生と触れ合う中で、自分自身が年を重ねていく中で、思います。

第七七回の研究会は福岡大学で個人研究の発表を中心に、対面とオンラインのハイブリットで開催します。参加者の皆様と広く対話が開かれますよう、そういう場がこれからも続いていきますよう、八十一年目の春に、改めて願います。

（堀本　嘉子）

発行元　原爆文学研究会事務局
〒八一四-〇一八〇　福岡市城南区七隈八-一九-一
福岡大学人文学部　中野和典研究室内
tel:092-871-6631　URL http://www.genbunken.net/